

昭和二十四年頃に日本に帰った者は筋金入りの共産主義者とソ連側にも日本側にも思われていたようだが、そんなものではない。食べ物の恨みは恐ろしい。

六月三十日舞鶴港に近づき、緑の山々が近づき祖国日本の風にあたりると感激の涙がポロポロと流れてくるのであった。

## 石炭の町カオルチャンカ

京都府 中西 勲

昭和二十年七月、東満州の牡丹江省横道河子で工兵隊として陣地構築や国境警備に当たっていた。その時、北の方の国境地帯で道路整備や橋梁補強などに働いていた現地人の労働者が続々と南下して来て、吉林へ帰るのだと言っていた。皆それぞれ薄いふとんをクルクル巻いて背負っていた。ふとんの中に鍋ややかんなどを包み込んでいる。これを持って彼らはどこへでも旅に出るのである。

八月になると、詳しくは判らないが時々見る新聞では、日本各地の都会がアメリカの爆撃機に空襲され大被害を受けている。ひしひしと危機感が身に迫って来る。九日には、ソ連軍が突如として東北ソ満国境を戦車部隊を先頭にして突破して来たということだった。関東軍の兵力百万と言われていたが、決戦に備えて沖繩へ移動していたので新たな兵力で防備されていた。ソ連の大戦車隊の激しい攻撃に、我が軍は第二、第三の後方陣地に下がるより仕方がなかったようだ。

八月十五日、重大放送があるというのでラジオを聴いて天皇陛下のポツダム宣言受諾の「終戦の詔書」を聞いた。日本軍はアメリカなどの連合軍に降伏したのだ。兵隊の我々はどうなるのか、捕虜になるのか、民間人となって帰郷出来るのか。数日は茫然としていた。

八月十七日、武装解除。我々が集めておいた小銃、機関銃などを持って行ってしまった。そのとき牡丹江の奥から開拓団の人々が何万人も、何日も何日も歩き続けているということ、吉林、新京（現在の長春）

へ出て日本に帰るのだと言っていた。真つ黒な顔をした母親が五歳くらいの男の子の手を引いていたが「食べるものがもうなくなりました。この子は病気になるました。もう歩けません。置いて行きますから私らが出発したあとで殺してやってください」と泣きながら去って行った。その子供はあとを追う力もなく道端にボタンと座り込んだきりだったが、その後どうしたか判らない。

我々はソ連兵のマンドリン（自動小銃）に追われて汽車に乗せられ北へ北へと走った。ウラジオオから日本へ帰すのだということであったが、半分は本当かなと思いつつ、八月三十一日、国境の街黒河から対岸ソ連領ブラゴエシチェンスクへ渡った。

ホロンロフというところにテントを張った。ここは農業地帯で、コルホーズ（国营農場）で馬鈴薯の収穫が抑留第一回の作業だった。原住民の農民が馬耕で掘り起こした馬鈴薯を一輪車に積み込んで小舎に運び、ここで選別をする。大中小と仕分けして、それぞれドングロスの袋に入れて積み上げて置くとトラックが取

りに来る。九月も末頃になると、テント張りの仮宿舎は朝晩寒さが厳しくなって来た。大陸の寒さには軍隊生活で慣れていたが、一日三〇〇グラムのパンと少しの雑穀の粥では作業どころか、生きているのがやっとだ。

昭和二十年の冬から二十二年の春まで、この農場から相当北の方の石炭の町カオルチャンカで炭坑の仕事をした。最初、現場の監督が我々に向かって「電気溶接の出来る者はいないか」という呼びかけに私は早速手を上げた。入隊する前は溶接の仕事をしたこともあり、軍隊に入ってから工兵隊だから溶接の作業をしたこともあった。

作業は、地の底より石炭を積んだトロッキを引き上げる太いワイヤ・ロープを支える台作りである。相当な重量を下から引き上げるため、よく破損する。それを作ったり取り替えたりが忙しいものであった。朝から空き腹であったが経験のある作業なので、炭塵にまみれて坑内の石炭掘りのことを思えば幸いであった。原住民と一緒に仕事をするのでロシア語も次第に判

り、彼らにもノルマがあり、物資も乏しく生活が困難のようだった。収容所へ内緒で持ち帰った石炭を焚くのだが、冬になると夜中は零下三十度〜四十度になる粗末な掘建小屋では、夜中に目が覚めたら寝られない時もあった。

昭和二十一年夏頃から民主教育なるものが盛んに行われて来た。夕食が終わった頃から、時間ほど各部屋毎にリーダーメンバー（日本兵の中から選抜して特別教育を受けた者）がやって来る。軍閥・財閥の横暴、戦争責任の追及、日本の民主化は労働者、農民が赤旗の下に結集しなければ敗戦日本の再起は不可能だ、まづ日本共産党の政府を樹立してソビエト連邦と手を組むことがこれからの日本の進む道だ、と激しい教育だった。質問でもする者があると、翌日は今まで以上の重労働の作業場へ送られるという噂もあり、おとなしく拝聴するより仕方がなかった。

昭和二十三年の寒さもそろそろやわらぎ始めた四月上旬、突如としてダモイ（婦国）出発となった。私物とてない我々の集合は早く、貨車に詰め込まれて出発

港ナホトカに向かった。

ナホトカにはソ連各地から兵たちが続々と集まって来ていた。頬は痩せ黒い目玉を光らせていたが、婦国が近づいた嬉しさは身体全体に溢れていた。この年月、飢餓と重労働に耐えて来た苦しみを誰彼となく語りかけているようだった。出発する日が近づき、日の丸の旗を高々と掲げて引揚船が入って来て、思わず涙がポロポロこぼれた。日本へ帰れるのだ、再び踏めないかも判らないと思っていた祖国の土を数日の内に握ることが出来るのだ。シベリアの奥地で冷たい土の中で眠っている戦友の霊も一緒に祖国へ帰ろうよ、と心の中で呼びかけたものだった。

昭和二十二年四月十六日、舞鶴港に上陸した。真っ白なエプロンをかけた婦人会の人々が大勢出迎えてくれた。肉親たちが待ってくれている故郷はもう目の前だ。帰ったぞ、生きて日本の土を踏んだぞと、足が地に着かない喜びとはこのことであろう。